

このテーマで、トインビー氏、池田氏は、善悪とはどのようなものであるかについて意見を交わしあい、どのようにして実践していくかを話し合っている。第3部第3章では細かく分けて8つのサブテーマに分けられている。それらのテーマを大きく3つに分けて論じていく。第1に善悪の性質と、善を体現するための具体的な実践。第2に愛の現代に対する意義。第3に人間が根幹に据えるべき価値基準。最後にこの論文のまとめとする。この流れに沿って本論文は構成される。

#### ① 善悪の性質と、善を体現するための具体的な実践

善悪の性質を議論するに先立ち、池田氏は荀子の性悪説と孟子の性善説を取り上げ、人間の善悪の本質は、どちらか一方によるのではなく、どちらも含むと指摘している。トインビー氏もこの意見に賛同しているが、その善悪を含む量的割合は、各個人によって異なると付け足している。

ここで、善と悪とは一体何であるのかという疑問が出てくる。この点に関しては、第三部で論ずることとする。

人は何が善であり、何が悪であるかということ、多くの場合理解していると両氏は考えている。しかしながら、実践にいたる際、障壁として“感情”が存在することも、共通して認識している。ここで池田氏は「殺人がいけないことは誰でも知っているが、殺人行為はなぜなくなるのか」（二十一世紀への対話 [下] p157）という疑問を例に挙げている。人は一定の倫理的規範を持ってはいるが、感情がその規範を超え、本来悪であると考えている行為に及んでしまうのである。ここで取り上げられる感情は愛、良心、慈悲といった、善に分類されるようなものではなく、自己中心性を帯びた怒りや嫉妬、所有欲といった感情である。これらの感情がある限り、人々は悪を完全に克服し真に善を実践しえないのである。そのため、いかにこういった感情を克服するか、ということが重要になってくる。

感情が発現する際に、さまざまな理由があると考えられるが、そのほとんどは欲望に起因するといつてよいであろう。つまり、自己の欲望が満たされない状態から、善悪問わず（多くの場合は悪であるが）、ある感情が生まれるのである。両氏は、人間の食欲性を引き出す欲望を、いかにコントロールすることができるか、という点についても議論を深めてゆく。

まず、欲望にはどのようなものが含まれるかということを見ていく。池田氏は種を維持するための本能的欲望、名誉欲、所有欲、権力欲、また、知識欲、美への欲求、人間的な愛や慈悲等を、欲望の例に挙げている。ここで、興味深い点が、美への欲求、知識欲なども欲求に分類している点である。欲望とは人を悪へ走らせることもある反面、文化や技術の進歩を促す働きもしているというのである。トインビー氏はこの点に同意する一方で、欲望について、それらを踏まえた上で、大きく2つに分け、周囲（本書では宇宙と形容している）を自分に従えようとする魔性の欲望と、周囲と調和を求める愛に向かう欲望に分類している。

魔性の欲望と愛に向かう欲望は、相反する性質を含んでいる。私はここで、双方に密接にかかわる性質として、恩を感じる感情というものがあるのではないかと思われる。ここで取り上げた恩の対象として、親や国家といった特定のものよりも、生命や宇宙といった普遍的なものを指す。これらに対する恩をどれだけ多く持ち、感じることにできるかによって、各個人が、どちらの欲望に傾くかが、決まるのではないだろうか。

両氏はその後、いかに魔性の欲望を抑え、愛に向かう欲望を発現するかという問題を対話している。池田氏・トインビー氏共に、それは不断の闘争によってのみ、実現されると結論付けている。そして、その際にトインビー氏は自己超克という言葉を用いている。

自己超克とはニーチェの「ツアラトゥストラはかく語りき」の中で引用されている言葉である。ニーチェは自己超克した者を超人と名づけ、神に頼る生き方をしないもの、自ら創造する者と定義し、「人間は克服されなければならない或物なのだ」（「ツアラトゥストラはこう言った」(上) 岩波文庫 p14) と記している。一方で、トインビー氏が考える自己超克とは「人間が“小我”を“大我”に統合させる道程において、自らの“小我”につきまとう欲望を克服すること」（二十一世紀への対話（下） p178）と定義している。

上記の二つの考えは共通しているように思えるが、克服すべき対象を“小我”と定義した点や、克服の目的として“大我”にいたる為、として点で、トインビー氏の考えが、より具体性を増しているように思われる。

“小我”とは、本書においては「個人的自我」であり、“大我”とは「宇宙的・普遍的自我」（二十一世紀への対話（下） p174）のことを指す。つまり、宇宙的普遍的自我へ自己を向けさせることを指しているのである。

自己超克といっても、一朝一夕になしえるものではない。一瞬の感情の爆発が、それまで築いた自己超克の歩みを崩壊させてしまうのである。必要なことは、先に両氏が述べた不断の闘争であろう。それなくして、善を体現する個人は確立されないのである。そして、真に自己超克を成し得た者のみが、利他の精神に立つことができるのである。

## ② 愛の現代社会に対する意義

ここでは先のテーマであげた、愛に向かう欲望について論じていく、池田氏は愛と良心について、人間が成長していく過程で築かれる後天的なもの、であるとし、社会的・歴史的影響が強いと捉えている。

一方で、トインビー氏はこの考えに異を唱え、愛と良心がそのような社会の規範によって引き起こされるものではなく、人間の進化の所産であると考えている。

この点について、私はどちらの意見も正しいと考えている。この両者の対立した意見を紐解く鍵として、過去、人類は何度も戦争や紛争を繰り返し、愛に反する行為を行ってきたことを取り上げてみる。現在にあって、確かに紛争は無くなってはいないが、その絶対量は減少しているのではないだろうか。ましてや、世界大戦といった巨大な戦争は、1945年から現在までは起きておらず、国際連合を中心とした平和主義体制が確立している。これを、知能が発達したことによる人類の進化とみるか、歴史的社会的教訓から後天的に確立したものであるとみるのか、どちらか一方のみの影響とは、いえないのではないだろうか。

トインビー氏は、歴史家という観点から、人類が犯した過去の残虐な行為や、原始人などの知能が低かったころと比べ、愛は知性が発達する進化の過程としてみていると推察され、池田氏は仏法の観点から、釈迦が仏教を興したように、およそ 2500 年前であっても、深い愛を持った人が存在しており、進化の過程というよりも、当時の社会背景が影響し、後天的に釈迦の愛の精神が確立したと推察されるのである。私は、むしろそのどちらも包括していると捉えた方が、自然のように思える。それでは、この愛といったものが現代の社会にあって、どのような役割を果たすかを考える。

トインビー氏は現在さまざまな国で行われているチャリティーを例に挙げている。氏によれば格差や、様々な問題に苦しむ人々をチャリティーは、それを行うだけでは十分ではないとしている。その理由として、チャリティーは常に受け取る側が、与える側より劣っているという考えが含まれている点あげられる。それは、時として不平等に繋がるチャリティーを、受け取らないという姿勢さえ生み出しているのである。この問題に関して、池田氏は、仏法で言う「慈悲」の概念「抜苦与楽」の精神が必要であるとしている。「抜苦与楽」は相手の苦しみに同苦し、その苦しみを抜き、楽を与えるという概念である。この思想が根底にあれば、思い上がった慈善行為などはなくなるはずである。私は、この考えはチャリティーという規模にとどまらず、現代の先進国と発展途上国との関係についても、当てはまるのではないだろうかと考える。なぜなら、ODA や技術支援といったものについ

て、先進国は発展途上国に対して、こちらが優れ、向こうが劣っている、というような考えが全くないとは言えないからである。その姿勢が、現在の先進国対発展途上国といった、国際連合での対立を築いているのである。技術支援等を積極的に行う国であっても、その胸中には、豊富に眠る資源などに目がくらみ、のちに得る事ができる利権のために奉仕する国も数多くある。

現代にあって、愛や良心が形式的なものとなり、押し付けがましく相手の立場に立たないものが数多くあるとあって良いであろう。それはまるで、慈善という顔の下に、計算高いエゴを覆い隠しているように見える。両氏が唱える、愛や良心とはそのようなのではなく、自らも進んで痛みを伴うような、自身を省みない同苦の精神に基づいたものである。この精神が慈善の根底に立脚しなければならない。なぜなら、経済や技術が優れている人々が、それらについて知識を持たない人々に比べ、生命が重要であり、優れているなどといったことは、到底ありえないからである。この点について、現代社会は大きな錯誤をしているのではないであろうか。愛が、現代社会で格差の是正や様々な問題解決に繋がるといふ重要な意義がある反面、その動機が利他の精神に基づいているか否かが、見極められなければならない。

### ③ 人間が根幹にすべき価値基準

第一節で疑問として残った善と悪について、何が善であり何が悪であるかという問題をここで取り上げる。両氏によれば、善と悪は時代によって変遷する。善と悪は流動的であり、一概に判断することはできないとしている。トインビー氏は自著の中で「善悪の区別の実際行動への適用となると、これは過去においても現在でも、道徳律というものが各々の文化において違っているように、きわめて多様である」（現代が受けている挑戦 p29）としている。善悪を一概に分類することができないとする反面、ある行為が善であるか、悪であるか、と判断する際に、重要な判断基準が、両氏はあるとしている。それは「生命の尊厳」である。

善悪の判断は、「生命の尊厳」という基準に、適しているか否かを精査する必要がある。トインビー氏は、この生命という定義について、単なる人間生命や動物といったものだけでなく、大地、空気、水、いかなる無生物であれ含まれるとしている。ましてや、自分と同じ民族や宗派に偏重した「生命の尊厳」などではないのである。

「生命の尊厳」という言葉は、とても重い印象を与える。両氏の意見を考慮すれば、人々が口にする食物から、ただ通り過ぎた道に生えている草木、取るに足らないと思ってしまうようなものにまで、尊厳があると考えるのである。もし本当に、そのように捉えることができるのであれば、人々はきっと、それらを無下に扱わないであろう。その精神があれば、それがいかなる取るに足らないものであれ、大切にすることははずである。そして、それらを守るためであるならば、自己を犠牲に差し出す、という精神が確立されるのではないだろうか。それなくして、利己から利他の精神は築かれないに違いない。その点を踏まえて両氏は、善悪を判断する基準に「生命の尊厳」を据えたのであろう。

### ④ まとめ

両氏が指摘するように、現代社会は多くのエゴに満ちている。私たちが理想とする世界は、どんな世界であろうか。日々の生活に追われ、他者の嘆きに耳を貸す余裕を、私たちはなくしてしまったのであろうか。「二十一世紀への対話」の随所では、人類が抱える問題があまりにも多く、それらの解決はとても困難であるように思われる。しかしながら、両氏はその解決の方途として、“小我”から“大我”へと変換しゆく、自己超克の実践を具体的に例示している。そして、他者に与える善が形式だけでなく、自己を否定し他者の立場に立った愛（抜苦与喜）である必要があると結論付けている。両氏が後世に託したかったことは、この点に尽きるといえるのではないだろうか。自らのエゴを克服し、現在苦しんでいる同胞、ひいては将来生まれてくる子供たちへ、一つしかない地球を繋いでいくこと、

それこそが彼らの二十一世紀へのメッセージなのである。

⑤ 参考文献

フリードリッヒ・ニーチェ (1885) 「ツアラトゥストラはこう言った」(上) 氷上英廣訳 岩波書店 第 61 刷 (2004 年発行)

フリードリッヒ・ニーチェ (1885) 「ツアラトゥストラはこう言った」(下) 氷上英廣訳 岩波書店 第 61 刷 (2004 年発行)

池田大作・アーノルドトインビー (2002) 『二十一世紀への対話』(上) 聖教ワイド文庫

池田大作・アーノルドトインビー (2002) 『二十一世紀への対話』(中) 聖教ワイド文庫

池田大作・アーノルドトインビー (2002) 『二十一世紀への対話』(下) 聖教ワイド文庫

A・J・トインビー (1966) 「現代が受けている挑戦」 吉田健一訳 新潮社 (2001 年発行)